

川崎市社会福祉協議会 ～ 学校教員に向けた「福祉教育研修」～

対象者：川崎市立小学校～高等学校の教職員

主催：川崎市教育委員会、川崎市社会福祉協議会（福祉教育推進会議において企画・立案）



取組みの背景

市内の小・中学校では総合学習の時間に福祉教育が取り上げられ、高校でも積極的に福祉やボランティア学習が行われています。しかし、これらの学習は疑似体験で終わることが多く、効果的な展開になっていない事例が見られました。

そこで、平成23年に市全体で計画的・継続的・効果的に福祉学習を推進するため「福祉教育推進会議」*1 を設置しました。この会議には、学校での充実した学習の展開を目指し、教育委員会の指導主事にも委員として参画いただいています。また、毎年実施される「福祉教育研修」は、この推進会議の一環として行っています。

*1 福祉教育推進会議は学識経験者、教育委員会、市民活動センター、各区社協の福祉教育担当職員、市社協で構成



目的・ねらい

本研修では教職員が福祉の学習について正しく理解するとともに、子どもたちの福祉に関する学びがより充実したものとなり、社協をはじめとする中間支援組織及び外部団体関係機関と学校が連携を図っていける関係づくりを目指していくことを目的に開催しています。（川崎市立教職員向け福祉教育研修実施要綱より抜粋）



活動概要

夏休みの期間に川崎市立学校の教職員向けに1日を通して「福祉教育研修」を実施しています。

山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科の高木寛之教授と川崎市総合教育センターカリキュラムセンターの指導主事に助言をいただきながら、福祉教育推進会議において事業企画～実施をしています。

【午前】

高木教授からは、福祉教育の基本的な考え方、障害理解から生活理解への変化、地域課題を把握したうえで福祉教育を学校現場でどのように実践していくかについての講義をいただいています。

社協職員からは、[①なぜ社協が福祉教育に関わるのか、社協組織についての説明](#) [②体験教材やコーディネート時の注意事項について](#) [③学校から相談を受けたときのコーディネートの流れ](#)、の3項目に分けて講義を実施しています。先生たちが子どもたちへ何を伝えたいか、地域特性やどんな福祉課題があるかを考え、福祉教育プログラムに反映していきたいことを一緒に考えていくことを伝えています。また、マイナスな感情ではなく”こんなことができるんだ”というようなプラスのイメージへの変換をもった内容にしてもらいたいことも合わせて伝えています。

その他、社協の取り組み事例も踏まえて、相談から依頼までの具体的な流れについて説明しています。前年度社協と一緒に取り組みをした小学校の先生からは、どのような視点で福祉教育を展開したのか、具体的な事例をもとに発表してもらいます。

【午後】

ワークショップでは、より良い授業に向けて模造紙とふせんを用意して指導案（プログラム）を各グループで作成し共有する場面を設けています。カリキュラムセンター指導主事からはワークショップにあたり、総合的な学習（探究）の時間の目標についてや単元作成の手順を、また高木教授からは先生から子どもたちへのアプローチ方法のヒントについて講義をいただき、グループごとに社協職員も交えて単元の作成を行い、共有、振り返りも行っています。



事前準備

- ①前年度（2月）
 - ・開催時期、事例発表校の選定、チラシ案の検討
- ②第1回推進会議（6月）
 - ・タイムテーブルの確定
 - ・社協発表事例について決定
 - ・小学校事例発表校への依頼



POINT

昨年度の反省をもとに研修内容を検討しています。

- ・事例発表校は昨年度社協がコーディネートした学校をピックアップして決定
- ・アンケート結果から先生方に社協の認知度が低いことが判明し、今年度は社協事業についての発表も盛り込むことに

当日

《基礎編》

- 1. 福祉教育についてのレクチャーⅠ（学識者／40分）
 - ・福祉教育とは何か
- 2. 福祉教育についてのレクチャーⅡ（社協／45分）
 - ・川崎市社会福祉協議会について
 - ・福祉教育プログラムの作成に向けて
 - ・社協が行うコーディネート
- 3. 小学校からの事例発表（前年度実施小学校／20分）



市社協職員からの講義の様子



POINT

- 1. 福祉教育の根幹を理解することが目的。また、体験型福祉教育の説明から自身が行っている学習展開を再度振り返ることで、単に福祉体験教材を利用して体験だけで行っていないかを見直すことも狙いとしている。
- 2. 学校の授業などに実際に関わっているゲストティーチャーの声を実際に福祉教育のコーディネートを行っている社協職員が発表することで、効果的なゲストティーチャーを利用した学習展開を検証していく。
- 3. 実際の授業の組み立て・準備～発表までのプロセスを担当教師から聞くことでプログラム実施のイメージをつかめるようにしている。

《実践編》

- 4. 福祉教育についてのレクチャーⅢ（学識者／25分）
 - ・福祉教育プログラム



POINT

- 4. 学校以外の機関とつながりを持つことの大切さの気づきと、更に効果的な学習展開に向けて検証する。

《ワークショップ》

- 5. 指導案作成（90分）
 - ・指導計画案作成にあたりフレームワークについて説明（川崎市教育委員会）
 - ・各グループでの単元作り（ウェビング）
 - ・シェアリング及び指導案のブラッシュアップ（45分）
 - ・指導案の発表と講師からの総括（50分）



POINT

- 5. 各グループに社協職員が入り、社会資源や疑似体験機材の貸出し、ゲストティーチャー等の情報提供を行いながらプログラム作成を行う。

振り返り

研修開催後、教育委員会で取りまとめたアンケートを元に福祉教育推進会議で振り返りと、来年度の内容について検討する場面を設けている。

福祉教育推進会議を中心に研修を進めているため、研修に関わったメンバーで振り返りと来年に向けての話し合いができることで、継続的な検討ができる体制ができている。



活動の効果

※アンケート結果より抜粋

- はじめに講師の福祉教育概論を受けたことで、社会全体の変化や最近の福祉の変容を知ることができました。社会福祉協議会の担当職員の方と一緒にグループワークを行ったので、地域のどんな施設や人と繋がれるかわかった上で授業計画を立てることができたので助かりました。
- 午前中の講話や実践報告もとても学びになりましたし、午後の単元計画を立てるのも同じ地区の先生と練ることができて良かったです。どの先生の講義も資料も丁寧に作ってくださり、さらに説明もその場が想像しやすいようにお話ししてくださりわかり易かったです。
- 子ども達になんでもかんでも疑似体験をさせるのではなく、一つの体験からどのようなことを感じ取ってほしいのかを明確に持って入れれば、一つの体験で充実した学習になると感じました。
- 今の福祉の課題にも触れることができ、学校現場で求められている福祉教育についても触れるとともに、実務的にも指導計画の立て方を実際にやってみることで理解が深まりました。知らないことをたくさん知ることができ、とても良かったです。
- 自分たちではイメージが難しかったことも、講師の先生にアドバイスをいただけたので疑問が解決でき、先を見通した授業計画を考えることができました。大変充実した内容でした。

今後の展望

今回の研修アンケートに「はじめて福祉（ふくし）について学び、何を子どもたちに学ばせたいのかを改めて考えることができた」、「それぞれの学校の特色を活かして単元づくりが行われていることを知った」、「他校の方々と意見を交換しながら話を進めるので新しい見方や考え方が生まれて勉強になった」、「現状の悩みを正直にその場で伝え合えてお互いに共有できた」などの声をいただきました。

「総合的な学習の時間」の創設により、多くの学校で福祉教育が取り組まれるようになりましたが、先生方も福祉の授業をどのように組み立てたらよいのか苦慮されている中で、福祉教育を担当する社協職員と一緒に研修に参加し先生方とつながることで、実際のプログラム作成までの過程に社協がより密接にかかわることができるようになりました。

私たちを取り巻く環境がめまぐるしく変化している中、地域においても社会情勢、社会構造が大きく変化しています。地域でのつながりの希薄化、「ひきこもり」「ダブルケア」「ヤングケアラー」「社会的孤立」「子どもの貧困」などの従来の制度のみでは解決できない課題への対応など、地域福祉に求められる役割は一層大きくなってきています。同時に福祉の「担い手」となる子どもたちへむけた福祉教育は、ますます重要となります。

先生方はもとより、地域住民の方々とも課題を共有し、「地域ぐるみ」で福祉教育を実践していく。子どもたちが多様な価値観の中で「ともに生きる」力をつけることを目的として、今後も福祉教育の新たな展開へチャレンジしていきたいと考えています。

VOICE

*当日の研修に同行して下さった社協職員からの一言

市社協と教育委員会の共催事業であり、圏域の小学校の先生が多く参加され、大学教授や市総合教育センターの先生など講師の方も入り、しっかりとした連携と目的意識の高さを感じました。

プログラム内容も充実しており、基礎的な講義や実践報告、グループワークも組まれて参加している先生の共通認識ができることや、社協職員による社協の概要説明などもされている点は大変参考になりました。

小嶋 利和（松田町社会福祉協議会）

先生と社協職員が同じ場所に集まって研修を受けたり、福祉教育の内容についての意見交換やワークを行う取り組みはとても実りのあるものでした。

この研修をきっかけに福祉の社協と教育の先生が同じ方向を向くことができるので、子ども達のためになる福祉の授業ができると感じました。

清水 恵佳（清川村社会福祉協議会）